



## 第17回千葉県子どもの人権懇話会 報告

～オンライン配信併用～

子どもの虐待防止オレンジリボンキャンペーン活動

「子どもたちどうしてる？」

「コロナ禍の今、学校、施設、家庭のリアル」

2020.11.3(日)13:00～15:00

千葉市民活動支援センター&ZOOM



主催 こども人権ネットちば

共催 千葉県児童福祉施設協議会 (特) ちばこどもおうえんだん

後援 千葉県 千葉県教育委員会 千葉市 千葉市教育委員会

## 第17回千葉県子ども的人権懇話会 ～オンライン配信併用～

子どもの虐待防止オレンジリボンキャンペーン活動



### 「子どもたちどうしてる？コロナ禍の今、学校、施設、家庭のリアル」参加者 43 名

司会：皆さまこんにちは。今年は例年きぼーるに子ども、若者、子どもに関わるおとなが集い、楽しみ、交流してきた「ちばこどもおうえんひろば」の開催がむずかしい状況です。

そこで、ウイズコロナの今、私たちは、子どものリアルな声や、身をもって表現している声なき声を受け止めながら、千葉の子どもたちが笑顔で生活できるには私たちができることは何だろうか？をテーマに今日の懇話会を開催することになりました。

#### シンポジスト

長井清治さん（小学校教諭）  
千田果歩さん（児童養護施設職員）  
中村幸恵さん（チャイルドライン千葉）

#### オンラインレポート

松山 晶さん（セーブ・ザ・チルドレン）

#### 司 会

金田奈津子さん（こども人権ネットちば）

### 「チャイルドライン」の電話にかけてくる子どものリアルな声 中村幸恵さん

- ・友達と会えない。家に帰ると疲れる。
- ・何をやっていいかわからない。ゲームばかりしている。これはいつまで続くんだろうか？
- ・志村けんが死んじゃった
- ・近くで感染者がでた。仕事の母が感染しな心配
- ・親の収入が減り、家で暴力がある。お母さんの家事のたいへんさがわかった
- ・公園にロープが張られ、遊具で遊べない
- ・手洗い、うがい、給食を前を向いて食べることを注意される
- ・勉強のレベルの差を感じる
- ・入学式に行っただけで、学校が始まったらすぐにテストだった
- ・大学に入ったが、オンラインで友達もできない
- ・有名な人の自殺に「自殺って生き方じゃないか？」と感じる

#### ■中村さんのコメント

不安やイライラをがまんして表現できないでいる子がたくさんいます。言いにくいことでも吐きだせるよう電話話では世間話もたくさんする。子どもたちは「ガンバル！」という言葉を使いがちですが、「ちょっと考えてみたい」くらいで、少し気持ちが前向きになったよう言葉が聞けると「話を聴いてよかったな」と思います。

### 児童養護施設でのリアルな子どもの声・ようす 千田果歩さん

幼児～高校生 70 人が暮らす施設で、男の子担当職員をしています。園内除菌、マスク着用、記録に残すなどに努め、感染者は出ていません。

- ・子ども達は休園、休校になり、遊びに行く近くの公園は 2 時間以内、コンビニは 1 時間以内、図書室への入室は 3 人以内と制限つきになった。
- ・職員は得意なことを活かし、園庭で一緒にサッカーや鬼ごっこで遊び、パフェやドーナツづく

りをして、子どもが楽しめるようにグループを回していた。夏休みには、地域のお祭りが中止になったので、園内で小さなお祭りをやり、子どもたちは交代制で金魚すくい、ヨーヨー釣りなどに参加した。

- ・ディズニーランドが休園中にお菓子のレシピが公開されたのをビデオでみて、チュロスやフレンチトーストを作った。
- ・泊りの行事は中止。少しでも楽しいことをと、人ゴミを避けて、言っている子どもがたくさんいます。日帰りで川にバーベキューに行ったら園内で過ごすのところが、「楽しかった！又行こう！」と喜んでいる。
- ・学校の宿題が多く、サポートが十分できない子もいる。
- ・家族との面会、帰省の許可が出ている子は、オンラインで話すことができよかった。

### ■千田さんのコメント

特に休校中は、私たち職員もプライベートな時間でリフレッシュしづらく、ストレスを解消しづらい日々でしたが、そんな中で、運動や料理の得意な職員がいて、子どもが飽きないように楽しいことをしてグループを回していました。

今までに経験したことがない時間を子どもたちは過ごしています。気持ちのケアを行うのはもちろん、園内で小さな事故やトラブルが起きないように、何か違和感を感じた時にはすぐに職員間で情報を共有し、対応にあたっています。

できるだけ子どもたちと一緒に過ごす時間を増やし、子どもたちに小さなストレスがあるのを感じた時には分かりやすく情報を伝え、話し合っただけで対応するようにしています。

大変な中、マスク、おもちゃ、食材などたくさんの寄付をいただいています。本当にありがたく、大切に使用させていただきます。早く以前の生活に戻るまで園一丸となって子どもたちを支援していきたいと思っています。

### 学校でのリアルな生の声・ようす 長井清治さん

33年間学級担任、再任用を経て、今年初任者サポートで5年生、妊娠補助サポートで1年生を担当しています。教育条件の改善を求めるとりくみもやっています。

- ・2月末に突然の休校要請が出た時、6年生の子たちが算数の授業中に「卒業まで残された日を大切に楽しく過ごそう、と言っていたのに」と大泣きしていた。
- ・卒業式で歌や呼びかけの表現はしないことになったが、中学校の先生に聞いた話だが、卒業式で「僕たちは最後にみんなと歌いたい！」とマスク姿で歌いながら退場したことがある。先生は制止することはしなかったそうだ。心をつにして卒業したかったことが感じられる。
- ・先生方は少しでも勉強を、とけっこうな量の宿題を出していて、家族のサポートを受けられる子と受けられない子がでて、中々きびしかったのではないかな。
- ・6月から分散登校になり、クラスの人数が減り、却ってゆっくり丁寧に関わることができ、こういう日常が過ごせるといいな、丁寧に関われる、環境はよかったとの声が多く聞かれた。
- ・突然日常にもどったが、さまざまなコロナ対策があつて、ともだち同士の関わりが制約があり、「よるな、さわぐな、くつつくな」になっている
- ・現在は徐々に日常に戻っているが、行事が中止、短縮になり、勉強だけはちゃんと・・・となっている。遅れをとりもどすために7時間授業になったり、長めの休み時間がナシになっている

- ・給食は前を向いて無言で食べ、「しゃべれなくて悲しい」と言っている
- ・歌、読み聞かせ、プール、修学旅行、合唱発表会、縦割りの交流ができない
- ・運動会は低、中、高学年に分けて個人走とダンスだけだったがいい運動会ができてよかったしかし、応援しあうとか、異年齢の関わりがないと低学年は飽きてしまう
- ・「黙動」「黙食」が徹底している。1年生は「こんなにゴミが集まった!」「もっと集めよう!」とか楽しみながらやっていることができない

## ■長井さんのコメント

教職員組合の役員として、「子どもたちひとりひとりが大切にされるとりくみ、先生方がいきいきと余裕をもって働ける職場環境づくり」に関わっています。その立場からコロナ禍における状況を話したい。コロナ以前の問題として、今の学校の子どもたちがたいへん辛くきびしい状況に置かれているという共通理解をしていただいた上で、聞いてほしい。ニュースなどでご存知かと思いますが、文科省から19年度の調査として、小・中・高校のいじめ、不登校などの調査が発表されました。

いじめの件数は前年度比54万件→61万件、不登校の児童生徒は16万人→18万人です。どちらも7年連続の増加です。児童生徒数は減っている中で、これだけ増えているのは深刻な状況だと思っています。18万人は年間30日以上欠席の数だが、日本財団のデータでは、「保健室や校長室登校はしているが、教室に入れていない人数」を調べ、中学生で40万人が入れていないという驚くべき数字がでています。

小学生も更に調べると大きな人数になってしまうのではないかと？暴力行為も昨年は6万3千件→7万3千件というデータが公表されています。

本当に子どもたちは何も悪いわけではなく、子どもたちが抱えている辛さ、苦しみを私たち社会が何とか受け止めていかねければならない。ユニセフ幸福度調査では、身体的健康度は先進国38か国中1位で、医療などは受けられている。しかし精神的幸福度は37位だそうです。

このようないじめ、不登校、暴力、幸福度の低さはリンクしているのではないかと思う。国連子どもの権利委員会が何年かに一度勧告をだしていますが、昨年4,5回目の勧告は「日本の子どもたちが過度に競争的な環境の中でストレスを抱えている」と指摘しています。

こういう状況の中でコロナ禍が起これ、子どもたちはどうなっているのだろう、と今日のお話を捉えてほしい。

本来学校は“寄ってさわってくっついて”育つところ。初任者の先生には「制約の中でも子どもたちが笑顔を見せてくれるために、楽しい係活動などもやろう!」と伝えています。

時間をかけて向きあうには先生方に余裕が必要だ。密を避けるためにも、少人数学級を実現することも。そのための署名活動をしています。

**司会:** シンポジストの皆さまありがとうございます。実は私も学童保育で働いていて「子どもたちはべたべたくっついてナンボ!」のところ制限があり、置き去りにしてきたかもしれない子どもたちの気持があるのを実感します。そんな気持ちをどのように受けとめて、工夫や取り組みをすることで、子どもたちが笑顔で生活できるのだろうか、考えていきたいと思っています。

後半は5分の休憩後、リモート参加のセーブ・ザ・チルドレンの松山さんからレポートいただき、質疑と交流を行います。

## セーブ・ザ・チルドレン「緊急子どもアンケート」（2020年3月1,422人）の子ども声

松山 晶 さん

国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン」は、日本では1986年から活動を開始し、東日本大震災の後、岩手、宮城、福島で子どものための緊急・復興事業を実施してきました。

活動を通じて「子どもの権利の実現」を目指しています。私の担当は「ストップ子どもの貧困」で、子どもが環境に左右されず、学びの機会をもてるための学習支援、子どもへの給付金、声をまとめた社会発信し、政策提言をする活動をしています。

今年3月17～31（2週間）に全国の小・中・高校生1,422人から回答された「コロナ禍での緊急子どもアンケート」によると、「困っていること。心配なこと」として、日常が送れない・人と会いたい（約1/3）、体調や感染の心配（約1/6）、勉強ができない、学校のこと（約1/6）と回答しています。

また、「これから大人・社会・政治にしてほしいこと」として、感染症への対策（15.6%）、学校生活のありかた（13.0%）、子どもの意見の尊重や情報提供（9.3%）と回答しています。

子どもの具体的な声としては、次のような声があげられています。

- ・急に決めて急に始めないでほしい。みんな戸惑っているし、先生がすごいしんどそう（小5）
- ・お昼ごはんどうするか、お金がかかる（中3）
- ・バイトに行けなくて今まで自分で払ってた学費や教科書代、定期代が払えない（高2）
- ・学校はオンライン授業が一切なく、学校からの連絡もないので、これから学校がどうなるかわからない（高1）
- ・聴覚に障害があり、マスクしている人と話ができなくて疎外感を感じる（高2）
- ・失われた成果に見合った成果が得られたのか専門家がしっかり調査して説明してほしい（高2）
- ・受験生。学校で自習したい。切実に勉強する環境が欲しい。学校に行きたい。授業を受けたい（高3）

### ■松山さんのコメント

人とコミュニケーションがとれないのがこんなにつらいとは思わなかった、という声。せっかくだから本を読もうと思っても図書館が閉館して本が読めない、という声は3月にあったが、その後図書館は、感染症対策をしながら開くことが決まり、今後休校になっても開館されることになりました。

当時は子どもならではの居場所がない、と書いてくれた子どもがいました。これらの声をまとめて、文科省、厚労省、子どもの貧困対策議員連盟などに広くとどけ、その結果をまとめてアンケートに答えてくれた子どもたちに届けました。詳しくはHPをみてほしい。

食糧支援「ひとり親家庭応援ボックス」の利用者アンケートを行った結果、「今後新型コロナウイルスで高校が続けられなくなる可能性」について2割の方が「可能性がある」と答え、「すでに高校生活にかかる費用を支払えなかった」と回答した人が少なからずありました。何とか自治体としても支援が必要だと考えています。

昨年「子どもの貧困と子どもの権利に関する全国市民意識調査」を、子どもと大人を対象に実施しました。以下の質問への回答で、「子ども」「大人」「子どもの実態をよく知っている大人」の意識をみると、今後、もっと子どもの意見を聴くべきではないか、と感じます。

Q：現在の日本社会で、子どもの貧困対策として税金を使うべきだと思うことを選択してください。

○大学教育にかかる費用の家庭負担を減らすこと・・・子ども 51.1%

大人 30.6%

子どもの実態をよく知っている大人 49.4%

○子どもの意見を政策や施策に反映することができる・・・子ども 27.3%

制度・仕組みをつくること 大人 16.5%

子どもの実態をよく知っている大人 30.3%

来年度は初めての国の「子どもの貧困実態調査」がされ、夏には公表予定となっています。調査内容を見てみると、当事者の声を聴くというより全般的に聞く内容で、もう少し焦点を絞って子どもに聞いてほしいと思っています。

## 質疑と交流

**市川**：すぐ近くの小学校の生徒が下校のとき校門を出ればワイワイ！という雰囲気がある。

今日の新聞に「学校内というより家庭内感染が多いのではないか」とも書かれている。「このままでは子どもはもちませんよ！」と是非学校の先生がたやPTAの方に声をあげていただけないか、と思います。

**長井**：私もそう思う。関わり合いなしに子どもは成長できない。ただでさえ自由な時間が少なくなっていて、日常ふつうにあることも「〇〇がにらんだ！」「△△が悪口を言った！」という言葉が出がちです。子どもは「ああしようよ、こうしようよ」と意見を言い合ったり、経験を積み重ねることで成長するものなのですが。

先生方も殺伐としないように、いちいち注意しないでかなり大目に見ているところもあるが、学校全体としては「感染がでたらたいへんだ！」と恐れています。一気に戻すことはなかなかできないが、「こういうことだったらできる」と徐々に広げていきたいです。

「子どもの意見表明権」を保障してあげることで、子どもたちはちからを発揮し、自己肯定感が育つ。中学校でカバンを自由にするかどうか子ども同士で話し合っただけの例、小学生で虫とり隊長をきめるときケンカになったが、子どもたちで話し合った例もある。こういうことをするには余裕が必要だ！

**鴻鳥**：生活困窮の相談窓口で働いている。子どもはおとなが思っている以上に傷ついている。そしておとなのことも心配していることがわかった。特に松山さんの「発信しづらい子どもたちの声をどう拾うか」は気になるところで、セーブ・ザ・チルドレンの方でこのような調査を、という考えがあれば聞かせてほしい。

**松山**：ほんとに生活がきびしい子たちの声をきき、それを社会に届けていくのはハードルが高いです。

昨年やった活動で、「子どもの貧困対策大綱」見直しの際、現金給付している家庭の子どもに「インタビューに参加したいですか？」ときき、OKの子どもたちに個別、2,3人のグループ、あるいはワークショップのかたちで会いに行き、声をまとめて、内閣府に届け、子どもの意見表明権を提案しました。国も「聴かないとは思っていないがどうやって子どもたちとコンタクトしたらいいのか？」との回答だった。今後の調査では手法を注視しながら提案していきたいと思っています。

す。

**鴻鳥**：生活困窮のネットワークとしてちばこどもおうえんだんの理事もしているので、是非今後協力させてください。

**岡田**：今日の声はほんとうにリアルです。大きなところでやらなければならないことがあり、一方で子どもに寄り添っている一人一人が相対してやれることがあるのではないかと感じます。どのように子どもと遊ばせようか、施設はどの行事ならできるか？子どもたちがいかにもしょんぼりしている時にどんな声かけをしたら元気になったとか、のお話も聞かせてほしいです。

**中村**：チャイルドラインは匿名なので、どこでだれが、とは言えないのですが、特に何かをする、というより、そこにいる子どもたちのその時のおもいを話すのを聴くのは”doing より being”、共にそこにいる時間なのですね。その中で「ほんとはこういうことやってみたいんだよね。こういう学校に行きたいんだよね」という言葉を出してくれ「あれ、自分はほんとはこういうことをやりたいんだ！」と気がついてくれれば、その後は追えないけれど、半歩でも進んでくれるのではないかと、うれしかったりします。

**寺田**：私はCAPで大人ワークショップをやったとき大人が「ワー久ぶり！」となった。今大人のも話せてないんですね。

今日の2時間でも「話すことは大切だ」と感じられました。先ほど長井先生が分散登校がとてもよかった、と言われました。ウイズコロナはこれからも続きますが、その可能性はあるのでしょうか？また先生同士が職員室で話し合える時間はあるのでしょうか？私たち大人も元気にならないと子どもは元気にならないではないか、と感じます。

**長井**：今担任の学級は33人の児童がいて、間隔を1メートル空けるのもむずかしい。毎年署名運動も毎年やっているが、今年はコロナ禍があり、全国校長会、知事会、中教審も世論をプッシュしてくれている。文科省も予算を伴わないから弱いな～とは思いますが事項要求はしている。

先生方とは、本当は昨日の運動会の後には「うちあげ」をするところだが、そういうことができず、分散昼食会を3つの教室に分かれてZOOMでやった。

若い先生方は勉強したい、という気持ちもすごくあり、先日の研修会では、30人募集のところ40人も集まり、密になってしまったこともある。今日のように、これからはリアルとZOOMを共有してじょうずにやっていきたい。

**千田**：もともと児童養護施設のお子さんはお家での楽しい経験が少ないので、できるだけ楽しい体験ができるように私たちも支援しています。今回コロナで不安やイライラを出せる子どももあるが、中にはふさぎ込んで表現できない子どももいます。園の子たちのためにも、やりたいことを子どもたちにきいて、一緒にとりくんだり、今までより多くの1対1の時間をつくり、世間ばなしや不安なことなど、何でもはなせる状況をつくるようにしています。

**司会**：会場の皆さま、ZOOM参加の皆さま、たくさんのご意見をありがとうございました。

それでは最後になりましたが、千葉県児童福祉協議会の森田さんからひとつインフォメーションをさせていただきます。

森田：私の方からは、11月3日「子どもの虐待防止オレンジリボンキャンペーン活動」として、千葉ポートタワーを1週間オレンジ色にライトアップする取り組みをご案内します。この「オレンジリボンキャンペーン」は、「ちばこどもおうえんひろば」とタイアップして4年前から始めたもので、オレンジのチョッキを着たライダーの方たちが県内各地を回って児童虐待防止をよびかける活動です。11月3日16:30～、是非時間のある方はご参加ください。

司会：皆さんよろしくお祈いします。それでは最後にこども人権ネットちば事務局長の米田さん、ごあいさつをお願いします。

米田：シンポジストの皆さま、ご参加の皆さまありがとうございました。今日は現場の皆さまからコロナ禍での子どもたちのリアルな声を伝えていただくことができました。

子どもたち本人の意見がきちんと聴かれているのかどうかについては、国連子どもの権利委員会の方からも「子どもの最善の利益」「子どもの意見表明権」をふまえた上で対策がとられるべきことが提言されています。

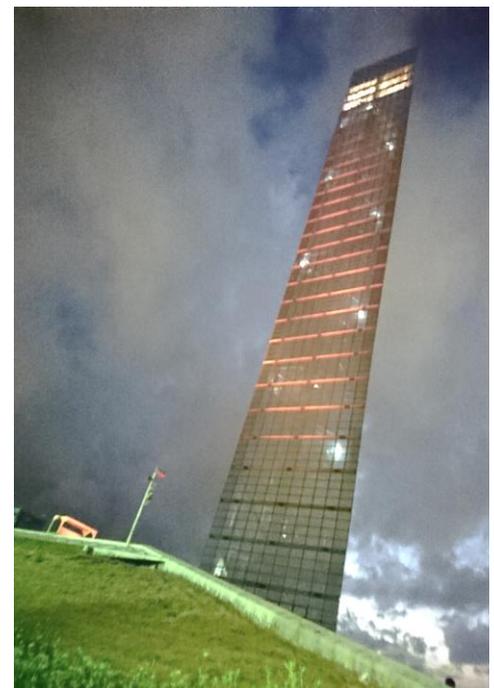
残念なことに、野田市で小学生の女の子が虐待を受けて命が失われる事件などが相次ぎ、「児童福祉法」「児童虐待防止法」が改正され、「被害者である子どもたちの権利を守るべきこと」が改めて明文化されました。

今私たちは、子どもたち自身が学校教育の中でも「子どもの権利条約」を学べるようなとりくみを県と一緒に初めているところです。

今回の懇話会は初めてのZOOM併用で、遠隔地からもご参加いただき、充実した2時間になりました。ありがとうございました。



11/3 ポートタワーに結集したオレンジバイク隊



オレンジ色にライトアップされたポートタワー